

京都学派最盛期の『哲学研究』を支えた中井正一

上 原 麻有子

哲学研究の発展のために不可欠な媒体、それが雑誌であると考えられるが、京都学派の誕生と成長は、やはり『哲学研究』に負うところが大きかったのではないか。そのことを確認するために、この発表では、学派成立直前から最盛期、つまり一九二〇年代後半から一九三〇年代に焦点を当てて、『哲学研究』がどのような役割を果たしたのかを具体的に描き、そこから第六百号記念特集号では、取り上げられなかった本誌の特徴を示してみたい。京都学派にとって重要な時期であったと言えるこの約十年間、編集者として雑誌を支えたのが中井正一であった。この中井の役割にも注目し、言及しておく必要があるだろう。

一 『哲学研究』の成立とそれを支える体制

著者は、二〇一八年度より京都哲学会の活動の企画と『哲学研究』¹の編集を担当している。また折しも京都大学の付属図書館が本学の紀要電子化という事業を開始したため、その一環として、『哲学研究』の全バックナンバーの在庫を確認する必要が出た。大量の雑誌が倉庫に未整理のまま散らばっていたが、文学研究科宗教学専修の浦井聡さん、ほかの学生さん、日本哲学史専修の私の学生たちの協力により、バックナンバーの在庫がすべて整理され、電子化の一部が、おそらく今年度中に実現するところまで進めることができた。たまたま担うことになっ

た役割だが、『哲学研究』の歴史に強い関心を抱くに至ったのである。

先行研究などで、すでに何度となく言及されていることであるが、ここでも、まずは雑誌発足の事情や編集体制などを確認することから始めることにする。

京都哲学会と『哲学研究』

『哲学研究』創刊号（第壹卷第壹册第壹號）の「京都哲學會規則」によれば、京都哲学会は「廣義ニ於ケル哲學の研究及其普及」を目的とした学会であり、一九一六年（大正五年）に「京大文学部の旧哲学科を母体として設立」された。雑誌『哲学研究』は、同年四月一日に創刊。月刊誌として出発し、この年のうちに九号まで刊行された。雑誌創刊の目的は、若手研究者の論文発表の場を作るということであつたようだ。⁽³⁾

編集体制

創刊号の「京都哲學會規則」には、「本會事業所ヲ京都帝國大學文科大學内ニ置ク」⁽⁴⁾、「本會ノ事業ヲ經營スル爲メニ左ノ役員ヲ置ク」との記載がある。この「役員」とは、「京都帝國大學文科大學哲學科教官及委員會ニ於テ推薦シタル者」である。これらの「委員（若干名）」により委員会が構成され、さらに「委員會ニ於テ囑託」する「書記（一名）」が置かれた。編集は、この委員と書記が担当していたらしい。

また創刊号の記載を見ると、役員は次の通りである。

委員 「文學博士」 西田幾多郎、朝永三十郎、狩野直喜、高瀬武次郎、松本文三郎、深田康算、藤井健治郎、

小西重直

「文学士」 千葉胤成、中川得立⁽⁵⁾、植田壽藏、深田武、米田庄太郎

書記 寶嚴方治

京都学派最盛期の『哲学研究』を支えた中井正一

編集の方針

「初號の編輯に就き」によれば、「本誌は原則として、最低百十二頁から最高百二十八頁迄位の中に論説、雜錄、彙報、内外哲学界の近況、新著紹介などを適宜に排置する方針」であつた。しかし實際は、論文の分量は予想以上に充實したものとつたようである。本号は「論説の紙數が大分豫定を超過した爲めに、已むを得ず雜錄以下の場所を狭める事とした」という。

編集者の努力

編集の負担は大変大きなものであつた。かつての編集担当者等による回顧録にしばしば記載されているので、知られていることだが、澤瀉久敬が、一九八四年に刊行された『哲学研究』に「第五〇号発行を祝して」⁽⁶⁾というエッセーを寄稿しており、そこに記した彼の記憶をここにあらためて引く。「日本の哲学の發展に大きな貢獻をした本誌を、蔭にあつて育て上げた歴代の編集者の苦勞は、一般読者の想像以上であつたと思う。私が学生時代特に親しくしていただいた中井正一さんが『哲学研究』の編集に傾けられた努力と熱情は、ひしひしと私にも感じられた。日本の哲学は『哲学研究』が引き受けたとの気概に中井さんは燃えていた。それは同氏一人のことではない。歴代の編集者は誰もがそうであつた。現在本誌の編集者は酒井修教授である…、私が以前に編集者であつたことから、幾度となくお手紙をいたしたが、その書面に窺われる教授のご苦勞やご努力は、おそらく他の教授がたの推察を遙かに越えるものと私は思っている」。

二 編集者、中井正一

澤瀉の言葉の中に、中井正一の名前が出たところで、次に編集者、中井と彼が見た編集の実状について報告する。

編集担当期間

情熱をもって編集に尽力した中井が編集者として活躍したのは、一九二五年（大正十四年四月）の百九号（推定）から一九三七年（昭和十二年十月）の第二五九号刊行までの期間であったという。京都帝国大学文学部哲学科を卒業した一九二五年、『哲学研究』の編集主任となった恩師、深田康算から、中井は「事務」担当を命ぜられ、前任者の高坂正顕から引きつぐ。その後十年以上にわたり、深田没後も何代かの編集主任に仕えた。

中井は、一九五一年二月発行の第四百号に「回顧十年―思いいずるままに」というエッセーを寄せ次のように述べている。「…卒業したばかりの私には、それがいかに重大な学界の責任を負わされたのか何も知らずに、ただつつしんで命を受けたままであった。…数代の編集主任につかえながら、夢のように過(7)こした。昭和一二年の反ファッショ運動弾圧に連座し、中立売署の特高主任の室で、いろいろの辞表を書く時、この『哲学研究』の辞表、だけはつらかった。こんなに自分の骨身に喰い込んでいたかと、ひそかに涙ぐんだ(8)。重責である編集の仕事が、中井の存在自体と、そしておそらく中井の哲学研究とも一体となっていたであろうことを思わせる文章だ。

これは、他の編集経験者らにとつても似たようなものがあった。例えば、澤瀉は「わが子のように本誌がいとしい」と書いている。「八年間、自分の研究は全く停止し、『哲学研究』の編集に文字通り専念した。期日通りに論文が提出されないこともしばしばあり、一度は、澤瀉自身が埋め合わせのための論文を一つ、「二十四時間で書き上げた」のだという。あるいは、執筆者宅へ「上り込み、座敷に正座したまゝで夜を徹し」原稿を待った(9)とも。まさに本誌刊行最優先で生活していた様子が、垣間見られる。

中井正一が「京都哲學會役員」のリストに名を連ねたのは一九三七年までであり、翌年の号にはもうその名を見つけることができない。寂しいかぎりだ。中井が『哲学研究』を去った理由は、治安維持法違反の疑いで検挙され、「三年間自由を失」ったということであった。彼は京大文学部講師の職を解雇された。また「学界」からも

「追放」され、「俗塵への顛落、さらに…遠く京都の地を流離してしまつた」のである。⁽¹⁰⁾
ここで、中井が編集を担当していた時期を中心に彼の略歴を見ておこう。哲学研究者、時代の先をゆく美学の提唱者、社会運動の中に入り込んだ活動家、そして何より「雑誌編集者」という顔をもつ中井の活動を確認しておきたい。

中井正一（一九〇〇・一九五二）の略歴⁽¹¹⁾

- 一九二二年 京都帝国大学文科大学（文学部）哲学科（美学専攻）に入学。指導教授は深田康算。
一九二五年 同大学卒業。卒業論文「カント判断力批判の研究」を提出後、大学院に進学。京大哲学会委員を嘱託され、一九三七年まで『哲学研究』の編集者を務める。
一九二九年 「機械美の構造」が岩波の『思想』に掲載される。
一九三〇年 雑誌『美・批評』を創刊。色彩映画『海の詩』、16ミリ映画『十分間の思索』などを多数製作。
一九三三年 京都帝国大学で瀧川事件が起こる。中井は文学部を中心とした学生の抵抗組織の中心となる。抵抗運動挫折後、新たな同人を加えて第二次『美・批評』を発行。「反ファッシュヨ文化情報」欄を一つの力点とする。
一九三四年 京都帝国大学文学部講師に就任。
一九三五年 『美・批評』を「拡大・発展」させた『世界文化』を創刊。中井は編集者の一人。
一九三六年 『土曜日』（週間新聞）の創刊。市民・勤労者のためのタブロイド判、「反ファシズムの同人グループ的文化新聞」⁽¹²⁾。中井は責任者の一人。
一九三六年 中井の哲学研究を代表する論文である「委員会の論理」を『世界文化』一月号―三月号に発表。

一九三七年十一月 『世界文化』『土曜日』等の活動が、反戦・反ファシヨ文化人民戦線運動であるとして、治安維持法違反の疑いにより検挙される。

一九四〇年 懲役二年、二年間執行猶予の判決を受ける。

一九四八年 国立国会図書館副館長に就任。

一九五二年 激務と心労のため胃癌で死去。享年五十二歳。

中井の編集と執筆

ここでは、雑誌編集とは具体的にどのようなものであったのかを、編集者、中井の記述から探る。当時の『哲学研究』の特徴が、そこに見えてくるはずだ。

中井は、「回顧十年」で次のように述べている。「一〇年間の編集で思い出とならない論文はないくらい、一つ一つ精選もした憎まれもした」⁽¹³⁾。この言葉から、寄稿数が多かったであろうこの時期、受け取った論文をすべて掲載できるわけではなく、採用すべきものを精選していたことが分かる。これは一種の査読であったのかもしれない。⁽¹⁴⁾また、船山信一の回顧、『哲学研究』と私の係わり合い」から知れるように、希望者が論文掲載を依頼するケースもしばしばあっただろう。船山は「私が次々と論文を持ち込むので中井氏は「またか」と困惑を示されることもあったが、突き返されたり、没にされたりしたことは一度もなかった」と記している。⁽¹⁵⁾

さて、一九二一年よりドイツへ留学中の三木は、ハイデガールの『存在と時間』刊行以前、一九二六年に逸早く、『問の構造—解釈学的研究』を投稿してきた。⁽¹⁶⁾中井はこう回顧している。『問の構造』というテーマは、その斬新さにおいて、私たちは驚倒したものであった」が、「『Sein und Zeit』が数カ月後に手に入ってみると、そのプレリユードのようなものであったのは、何かくやしい思いをしたものである」⁽¹⁷⁾。この言葉をどう解釈したらよいか。

三木による「問」というテーマの展開は、『存在と時間』の中では、第二節「存在への問いの形式的構造」に対応していることが分かる。嶺秀樹によれば、「問の構造」は、遡って、三木がマールブルクで聴講したハイデガーの「一九二二—二四年冬学期の講義」に、「全面的にと言つてよいほど：依拠している」。日本での三木周囲の反応は、「問の構造」は、一九二七年発表の「解釈学的現象学の基礎概念」(『思想』第六十三号)とも併せて、ハイデガーの「人間的現存在」の思想から強い影響を受けて出されているが、三木の独自性が見られるという捉え方であつたようだ。⁽¹⁹⁾若手哲学者同士、相手の研究動向が気になるのは当然で、中井としては、ドイツから最先端の思索を発表しようとした三木に先を越された、という競争心に駆られたであろう。⁽¹⁹⁾それを後年、「プレリユードのようなもの」と美しく表現したのだ。

一方、中井は、当時日本では「三カ月を争うほど、学界の動きがあつたのであつた。東京に負けまいという若いものたちの張気は、日に日に進むこの学界の勢いを反映していたといえる」と書いている。⁽²⁰⁾京都学派の哲学者らが、東京大学の哲学界をライバル視していた様子が伝わってくる。東京と京都の両哲学界の間には、現代では感じられないような競争があり、編集の舞台裏を知る中井はそれを目の当たりにしていたのだろう。

『哲学研究』の編集委員であり優秀な論文を発表する少壮美学者⁽²¹⁾として知られた中井は、かなり精力的に執筆もした。以下、編集担当期間中、『哲学研究』に掲載された中井の論文と書評を示す。

論文

「カント第三批判序文前稿について」(一三六号、一九二七年七月号)、「言語」(一三八号、一九二七年九月号一四五号、一九二八年四月号)、「発言型態と聴取型態並にその芸術的展望」(一五五号、一九二九年二月号)、「意味の拡張方向並にその悲劇性」(一六七号、一九三〇年二月号)、「機能概念の美学への寄与」(一七六号、一九三〇年十一月号)、「カントに於けるKritik-とDoktrinの記録について」(一八三号、一九三二年六月号)

ここにカントの『判断力批判』に関する研究が二つあるが、一三六号掲載のカント論は、中井の学界デビュー作である。この研究が生まれた背景を見ておこう。ドイツでは『判断力批判』の「序文前稿」が初めて完全版となり、これを収めたカッシーラ編集の新版『カント全集』が刊行された。そしてカッシーラの『カントの生涯と学説』（一九三三年）は、ドイツのアカデミーの世界では重視された。一方、京都大学では、カント学者の権威とされていた田辺元が、『判断力批判』を主に扱った『カントの目的論』（一九二四年）を出版し、「学界に大きな影響を与えた」。また深田は、岩波書店刊行の『カント全集』に所収される予定の『判断力批判』の翻訳を準備していた。⁽²²⁾中井は、当時このような環境の中で「カントの第三批序文前稿について」を発表したのである、

「言語」と「発現型態」は、一九三六年に発表される「委員会の論理」を準備する論文と見なされる。「意味の拡張」は中井の芸術・技術論につながる。そして「機能概念」は、カッシーラの「機能概念」を再解釈した論文で、中井の新しい美学、技術論展開の基礎を作った。

書評「『新刊紹介』の欄」

「ヨハンネス・フォルケルト著『悲劇美の美学』（金田廉訳）（一一四号、一九二五年九月号）、三木清著『パスカルにおける人間の研究』（一二五号、一九二六年八月号）、戸坂潤著『イデオロギーの論理学』（一七三号、一九三〇年八月号）、宗藤圭三著『統計学原理』（二八三号、一九三一年六月号）、柴田寅三郎編『手島堵庵全集』（二八三号、一九三一年六月号）、田辺元著『ヘーゲル哲学と弁証法』（一九三号、一九三二年四月号）、三木清著『歴史哲学』（一九四号、一九三二年五月号）、亀井高孝・野上豊一郎・石原純編『岩波 西洋人名辞典』（二〇五号、一九三三年四月号）

第一八三号には、カント論と書評二本を寄稿しているが、その仕事ぶりに注目したい。中井は「三カ月を争う」動きの速い学界の中で、優れた研究を迅速に選別する編集者の才能を十分発揮していたと言えるだろう。例えば、

『パスカルにおける人間の研究』（一九二六年六月）の書評では、次のように述べている。「ハイデッガーを創始者とする解釈学、しかも彼がいまだそれについての著書をもっていない以上、それによつて研究されたる本書は、日本における彼の方法についての最初の紹介書である誇りをもつことができるであらう。ともあれ、純粹意識、あるいは純粹知覚のごとき抽象的概念に疲れはじめた、日本の若き思惟者たちに贈られたるこの贈物が、はたしていか
に受けいられるかについて、私たちは深い興味をもたずにはいられない」。⁽²³⁾

三 『哲学研究』と京都大学

田中美知太郎の回想、『哲研』に書いたもの」によれば、「おそらく一九一〇年代後半にはそうであつたと推測されるが」、「当時の京都大学は哲学のメツカの観があり、機関誌の『哲学研究』は言わば晴の舞台として全国的な注目を集めてゐたのである」。そして田中のように、若者たちは書店で「田中の場合は東京の書店で」、「『哲研』を手にし、講義題目や卒論のリストを見ながら」、京都大学を選び、そこで学ぶことを目指したということらしい。⁽²⁴⁾

『哲学研究』は、研究論文発表の場であると同時に、哲学に関する様々な情報を提供する役割も担つていたと言える。哲学界を活性化し、京大へ若者をひきつけるための媒体として機能していたのではないか。

編集者、中井がいた頃の京都の学界

「この一〇年間の京都の学界は、まことに百花撩乱の時代でもあつた」と、中井は振り返る。一九二八年に、西田幾多郎は定年退職。中井は、以下のような名前を挙げている。深田康算、朝永三十郎、波多野精一、藤井謙治郎、小西重直、松本文三郎という教授陣のもと、「少壮気鋭の助教教授講師陣、天野貞祐、田辺元、和辻哲郎、山内得立、植田寿蔵、小島祐馬、九鬼周造」が「星のごとく輝」き、それをとりまく若手に「三木清、戸坂潤、西谷啓

治、高坂正顕、木村素衛ら」が、その下の世代には「下村寅太郎、高山岩男、真下信一、淡野安太郎」らが出た。先生たちの家に集まっては議論をしたのだという。例えば、「田辺博士の土曜日の訪問日は、きらびやかなゼミナールにも等しかった」と中井は書いている。⁽²⁵⁾

京都学派と『哲学研究』にとつて、西田幾多郎の存在は何よりも重要であつたはずだ。創刊号の巻頭を飾つたのが、西田の長篇論文、「現代の哲学」であつた。山内得立によれば、「現代哲学の特色が鮮やかに描出せられ、よくまとまつた上に潑刺たる意気込みがあつて人々を瞠目せしめたものである。他人の思想を紹介するにもやはり自分に何ものがなければ出来ないものだということが先生によつて示された」。ここでの「現代の哲学」とは、「主としてドイツ哲学」であり、そこに新カント学派の哲学とフッサールの現象学があることを紹介している。この取上げ方は、山内によれば「西田教授を以て嚆矢とする」。『哲学研究』の創刊は、西田にとつても「二転期をなした」のである。『善の研究』の思想的背景にあつたのは「主として英米の心理学」であり、西田の「ドイツ哲学の本格的な研究が初まつた」のは、京大着任（一九一〇年）後ということになる。⁽²⁶⁾

また、一九二〇年代後半から昭和の初めにかけて、西田哲学は頂点に達していた。哲学科には定員七〇を超える志願者があり、大半は西田にあこがれた「純哲志願者」であつたといふ。⁽²⁷⁾

四 西田・田辺論争

最後に、中井から見た田辺元の哲学と西田・田辺の論争を簡単に紹介しよう。中井の文章には、やや西田より田辺を支持する傾向が感じられるのであるが、例えば、田辺元著『ヘーゲル哲学と弁証法』の書評においては、次のように述べている。「この即物弁証法の立場は、唯物弁証法の荒いいぶきの中にあつて、特殊の立場として今後の弁証法の観点の一モニュメントとなるであろう。…いわゆる古き観念論に満足するあたわず、さりとて唯物論にも

趨くあたわざる、進歩的にしてしかも抽象を避けんと欲する青年思想家にとつて、それは一つの帰着点であり、また一つの出发点ともなるであろう。⁽²⁸⁾

中井は、「絶対無」をめぐる西田・田辺論争の要点を回想している。「西田先生の教を仰ぐ」が、一九三〇年、『哲学研究』第一七〇号に発表された。中井によれば、田辺は次のような疑問を呈したのである。「西田博士の」絶対無の自己限定の立場が窮極において発出主義に導く恐れなきか、哲学はかかる絶対観照の直観に対応する構成を避けて、二元相対の統一化の過程的立場に留まり、絶対的なるものはただ理念として要請せられるほかなきにあらざるか。⁽²⁹⁾しかし、西田はこれに答えず、翌年の『哲学研究』第一八四号で、絶対無について「われわれの自己は自己の中に時を包み、各人は各人の時をもつということが出来る」という主旨のことを述べた。これは中井の理解であるが、西田博士は、田辺博士の「肉迫と対決」に対して「軽くあしらわれたのである」。⁽³⁰⁾

西田の「体系」（一般者の自覚的体系）に対して、田辺は「行為の媒介」という概念を立てた。それは、一九三七年の『哲学研究』第二五九号に寄稿した、「種の論理の意味を明にす」においてである。中井の関心は、田辺の説明の次の点にあった。「行為は…表現的存在を否定するところに成立する…。実存哲学における無が、解釈せられたる無であり、行為は決断の可能にとどまる」のである。むしろ「行為の媒介が肯定否定の間を統一するによって、論理の概念が存在の形成原理となる」。

中井はこの「行為の媒介」という問題を評して、「ファシズムに反対して、政治実践に行為をもつてつっ込んでいた少壮の学徒にとつては、一つの大きいなる示唆の意味すらもつていた」と述べている。そして、田辺の「否定の深淵を越えさせる何らかの媒介」⁽³¹⁾という疑問に、死によって応えたのが、「行為して、無に躍入した三木清と戸坂潤」であったのだ。彼らの死は媒介であったと、中井は理解したのではないか。

中井自身は、「この論文の校正を最後に」、京都を離れた。私が田辺の「行為の媒介」などをめぐるエピソードに

紙幅を割いたのには、理由がある。私見によれば、「委員会の論理」で展開された集団主体の立場と独自の弁証法には、田辺の弁証法と媒介の思想が深く影響している。中井は、哲学者としてまた編集者として、西田・田辺論争を「悲壮なる思い」で見守ったのだ。中井は、三木、戸坂とは異なる方法で、つまり「委員会の論理」という哲学論文を通して、田辺が西田に向けて発した「行為の媒介」という疑問に答えたのかもしれない。

注

- (1) 雑誌には『哲學研究』と旧漢字で記載されているが、本稿では新漢字を採用する。
- (2) 『哲学雑誌』の刊行目的は、これとは異なるものであったようだ。高峰一愚『哲学研究』回顧』、『哲学研究』五百五十号、六〇八）を参照。高橋は一九三〇年、東京帝国大学文学部哲学科を卒業。帝京大学教授。日本カント協会委員長。この「回顧」の中で次のように述べている。「東京大学哲学科第一回卒業生井上円了の奔走によつて明治二十年二月『哲学会雑誌』が創刊された時、哲学会々頭加藤弘之は：「各派其学会を設立して相い競争する如きは固より思ひも寄らぬ事と云はざるべからず、是を以て今日に於ては印度哲学者も支那哲学者も西洋哲学者も皆相合して此一哲学会を組成して其中に於て互に相研究するを以て足れりとせざるを得ざるなり云々」と言った。『哲学会雑誌』は五年後『哲学雑誌』と改称され月刊雑誌として昭和二十年一月まで続いた。：「各派其学会を設立して相い競争する」気運は数十年を待たずして将来せしめられた」。
- (3) 「京都哲学会のページ」(http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/western_philosophy/wph-kps_top_page/) 朝永三十郎『哲学研究』の発足(第四百号)。「座談会 京都の哲学と『哲学研究』」(第六百号)、八十九。
- (4) 「文科大学」は正式名であるが、通常「文学部」と呼ばれる。
- (5) 山内得立のことである。中川は旧姓。
- (6) 『哲学研究』第五百五十号、六〇二。
- (7) 中井正一「回顧十年―思いいずるままに」『中井正一全集』(NMZ) 第一巻、美術出版社、一九八一年、三四九、三三三。
- (8) 同右、三四九―三五〇。

- (9) 『哲学研究』第五百五十号、六〇二六〇三、前掲。
- (10) NMZ 1、三五五、前掲。
- (11) 「中井正一略年譜」(NMZ 4、一九八一年、三七二二二七五) から抜粋。
- (12) 「土曜日」について」で久野収が使った表現。中井正一『美と集団の論理』久野収編、中央公論社、一九六二年、一九五。
- (13) NMZ 1、二五二。
- (14) 『哲学研究』第六百号記念特集号の座談会では、「査読はなかった」ということが話題に上った。日本では査読制度がいつからどのように導入され始めたのか、不明であるが、少なくとも『哲学研究』や『哲学雑誌』にその嚆矢を見ることは難しい。
- (15) 『哲学研究』第五百五十号、六〇五、前掲。
- (16) 『哲学研究』第二百二十四号・一九二六年七月、第二百二十八号・一九二六年十一月に掲載。これは、『哲学研究』第五百号記念特集号の「哲学研究総目次(自第一巻 至第四十三巻) 附 執筆者別索引」で確認した。しかし『三木清全集』第三巻(岩波書店、一九六六年)の「後記」では、各号それぞれ「大正十五年九月、および昭和二年一月号」に掲載とされている。
- (17) NMZ 1、三五二。
- (18) 嶺秀樹「ハイデッガーと若き三木清」『人文論究』68-3、関西学院大学リポジトリ、二〇一八年、四一。
- (19) 嶺は三木の思索をハイデッガーの『存在と時間』および「一九二二—二四年冬学期の講義」に照らして仔細に比較検討し、個人的におそらく入手したハイデッガーの講義録の活用について、その曖昧なところを突いている。三木の「問の視点を導くもの」としての「関心」の論じ方は、「ハイデッガーの講義の中で「関心の特徴的契機」が分析される箇所(第一二節)にかなり対応しており、三木の議論がハイデッガーの剽窃として疑われても仕方がないところである」と述べている(嶺、同右、八)。出典を明記するなどの学術的習慣が、当時は今のようではなかったことを鑑みると、中井の「くやしき思い」がこの「剽窃」への疑いをも含意していたとは言えないが、想像してみたくはなる。
- (20) NMZ 1、三五二—三五三。
- (21) 酒井梯(国立国会図書館顧問)「副館長就任まで」『付録』NMZ 4、一九八一年、十七。
- (22) 久野収「解題」NMZ 1、四六八。

- (23) NMZ 1, 三六四―三六五。
- (24) 『哲学研究』第五百五十号、五九六、前掲。
- (25) NMZ 1, 三五〇。
- (26) 山内得立「哲学研究」の初めの頃『哲学研究』第五百号、二七五―二七六。
- (27) 藤田貞次（東京書籍取締役）『美・評論』『世界文化』『土曜日』の誕生前後』『付録』NMZ 2, 一九八一年、十四。
- (28) NMZ 1, 三七九―三八〇。
- (29) 中井「田辺元著『ヘーゲル哲学と弁証法』」NMZ 1, 三七八。
- (30) NMZ 1, 三五一―三五三。
- (31) 田辺は「種の論理の意味を明にす」（『田辺元哲学選』1、岩波文庫、二〇一〇年、三六四）で、次のように述べている。「有は無でなく、無は有でない、この否定の深淵を越えさせる何らかの媒介があるのでなければ、両者の統一は成立することができると答が無さう」。

（筆者 うえはら・まゆこ 京都大学大学院文学研究科教授／日本哲学）